

読むたび、新しい旅

ひととき

hitotoki

5

2025

大阪 MADE IN

《特集》
進化を続ける
大阪のものづくり



《新連載》
学者芸人サンキュータツオさんの職人探訪
「サンキュー！マイ★スター」

定価 700円(税込)

ものづくりは 人づくり

ものづくりが地域に根付くためには、職人技の鍛錬に加え、技術をどう伝承していくかが問われます。大阪市西成区と堺市で次代へのバトンを渡そうと奮闘する職人たち取材しました。



1970年代頃の大阪市西成区鶴見橋商店街。靴店が並んでいる



大阪府立西成高校靴づくり部 [上] 部室中央で高校生らに靴づくりを教えるのは、ロカシューの大山一哲さん。右に立つ顧問の肥下彰男先生とともに活動をサポート [下右] 生徒に広い視野を持った大人になってほしいと語る校長の山田勝治先生 [下左] 靴づくり部の生徒たちがデザインし、仕上げた靴

Made in OSAKA

高校生へのバトン
伝統の革靴
〔大阪市西成区〕

大阪市の浪速区、西成区は古くから皮革・製靴産業が盛んな地域だった。昭和30年代には「靴を買うなら西成で」といわれるほどの隆盛を極め、特に婦人靴では全国の約70パーセントを生産する寡占状態にあった。しかし近年は安価な海外製品の流入によって廃業する工場が急増し、70社を切るまでに減少。これは10年前の2分の1の数だという。

そんな寂しい状況の中、ひとり気を吐く男がいる。靴の製造、卸、販売を手掛ける「ロカシュー」の経営者、大山一哲さん53歳である。

大山さんは生粋の西成育ち。生家は小さな製靴工場がひしめく鶴見橋商店街の一角にあった。

「かつての西成の靴工場はみんなそうでしたが、1階が工場で2階が住居。生まれた時から靴まみれの生活でした」

一時は教員を目指したが、実家のアルバイトで自ら中敷きを入れた靴を道頓堀で偶然見かけて、人生が変わった。

「向こうから歩いてくる女性に思わず、

高校が近いから靴づくり部を作りましようよ」とポロリと言くと、代表が「大山さん、それおもしろいわ」と即応。早速大阪府立西成高校の山田勝治校長に話をつないでくれて、2022（令和4）年、日本で唯一の「靴づくり部」が誕生する運びとなったのである。

山田校長が言う。「西成は日雇いの町として偏見の目で見られがちで、校名からうちの学校も偏見を持たれやすい。では偏見をはね返すにはどうすればいいかと考えたら、西成には靴づくりというプライドを持てる産業があるじゃないかと。それを生徒に伝えたいと思っていたら、大山さんが部活の話を持ってきてくれたんです」

西成高校は2024年度からステップスクールに指定され、障がいのある子、外国にルーツを持つ子、貧困家庭の子、不登校だった子などが多く在籍する。「今年度から『にしなり学』を開講して、大山さんにも靴づくりの授業を10コマ担当してもらいます。西成高校に来たことで、生徒に自信を持つてほしいんです」

靴づくり部の顧問、肥下彰男先生の案内で部室を見せてもらうことになった。低い机の上にラスト（木型）、ワニ、イチキリ、裁ち包丁など異形の工具が雑然と置かれている。工業用ミシン、すき機などの機械類は、全て大山さんが自費

で持ち込んだものだという。現在の部員は智輝君、聖也君、結子さん（3年生）、小桃さん、紗那さん（2年生）、結奈さん（1年生）の計6名。1年間で1足程度のゆっくりとしたペースで、本格的な革靴を作り上げる。ほとんどの部員が、靴づくりという珍しい活動に取り組んでいることが自信につながっているというのだが、意外にも将来靴職人になりたいという部員は少なかった。3年生の聖也君が言う。「卒業後は製菓学校に通います。製菓業界に就職して生活が安定したら、大山さんのエスペランサ靴学院で勉強したい。カフェを開いて、靴を磨いている間にケーキを食べてもらおうのが夢なんです」

*西成高校で発足した地域の歴史や特性を学ぶ授業で、地場産業である太鼓づくりや靴づくりを体験学習できる

靴づくり部の3年生、結子さん作の青い編み上げブーツ。年季の入った革漕ぎ機は現役で、大山さんが高校生のために調達したものだ



すみません靴を脱いで見せてくださいって頼んだらやっぱうちの靴で、もう稲妻が走りましたね。これが自分のデザインした靴やったら、どないやねんって」

父親に頼み込んで、東京は浅草のエスペランサ靴学院で学び、イタリア留学も果たして靴づくりの世界に飛び込んだ。天国も地獄も味わったが、いま大山さんが情熱を傾けているのが、人づくりだ。縁あってエスペランサ靴学院の学院長になった大山さんは、地元西成にある西成製靴塾の代表からも塾長への就任を打診される。その話し合いの中で、「西成



エスペランサ靴学院 [上] 皮革を加工する工具がずらり [下] この日の授業では、シューフィッティングの専門家を招いた講義が行われており、生徒たちが熱心に耳を傾けていた



藤井製桶所 [右]兵庫の剣菱、広島賀茂鶴、秋田の新政など、藤井製桶所がメンテナンスを請け負う名だたる醸造蔵は全国にある。こちらは奈良県橿原市のミヅホ酢の仕込み桶 [左上]工房は新桶製造の真っ最中 [左下]桶文化をつなぐ上芝雄史さん



Made in OSAKA

最後の桶師 杉桶をつなぐ「堺市」

日本の醸造文化を支えているにもかかわらず、製桶業は久しく風前の灯だ。底板に向かつて絶妙なカーブですばむ側板「樽丸」同士の「正直面」を組み合わせ、釘や接着剤を使わず竹の籐だけで一滴の水も漏らさない、驚くべき職人仕事。

藤井製桶所は、代表・上芝雄史さんの祖父が1920（大正9）年、堺に創業した。堺は酒蔵の多い兵庫や商都大阪と、杉の産地・奈良吉野の間にある。幹線道路が通じ、堺港を擁する交通の要衝でもあるため、昔から吉野杉で作られた堺の桶が、各都市へ納められてきた。

創業当初は、醸造メーカーはもちろん家庭の台所でも桶を使うのが当たり前。注文は途切れなかった。しかし、戦後にロータリーが回ると、「木桶は不潔」という誤った認識が持たれ、製桶業は衰退の一途をたどる。それに、大桶は100年は持つ。新桶発注は少なく、修繕の売上だけで会社を維持するのも難しい。数々の製桶所が廃業し、30石（約5400リットル）サイズの大桶を製造できるのは、いまや藤井製桶所だけだ。

編集部 オススメ!
藤井製桶所の杉桶

藤井製桶所では、家庭用の桶も製作している。上芝さんのイチ押しが、吉野杉の材を使った桶。味噌の仕込みや漬物など、用途は多彩だ。ほんのりとしたさわやかな香りも心地よい。ご家庭にひとついかが？
吉野杉の桶 6リットル 18,400円（藤井製桶所）



絶対に、白紙にしない

上芝さんも2020年（令和2）年には廃業すると決め、顧客の醸造メーカーに「新桶はもう作らない」と宣言した。が、驚いたのはメーカーだ。兵庫の剣菱、広島賀茂鶴、秋田の新政、奈良のみむろ杉醸造元今西酒造……。みな大桶がなくては商品を仕込めない。存続を願う声に、上芝さんは決断した。「ならば



エスペランサ靴学院の生徒、沢田ゆりさん作の靴は、履きやすさ重視の曲線と見事なツヤ

養成したいわけではないという。「最初はまったくしゃべらなかつた子に、いまからミシンするからおっちゃんの方見てみ、なんて言うのと、パツと目線が上がってだんだんコミュニケーションが取れるようになっていく。それがものづくりのすごさです。靴づくりは厳しい世界だから、心の底から靴を作りたくなつたら、その時に再開すればいいんです」

顧問の肥下先生の思いはまた、別のところにあるようだ。

「日雇い労働や皮革産業で日本社会の底辺を支えてきた西成は、日本有数のセーフティーネットを持つ地域でもあります。西成の生徒たちには、日本中に貧困が広がっていく時代だからこそ、この地域が大切に紡いできたものを全国に向けて発信してほしいと願っているのです」

大山さんの人づくりのもうひとつの拠



点、エスペランサ靴学院を訪ねると、こちらは本格的なプロの養成機関であった。生徒の沢田ゆりさんは、まさに「心の底から靴を作りたくなつた」ひとりだ。

「以前は、動物園の飼育員としてペリカンやワオキツネザルを担当していました。飼育員も夢の職業でしたが、靴づくりも捨てがたかつたんです。だって、一枚の革が立体になって人を支えるものになるなんて、靴ってすごいと思いませんか」

沢田さんは1年間で10足の靴を作り上げ、すでにある工房で研修に入ることが内定している。大山チルドレンたちは、確実にもものづくりの喜びを味わい、それを生かす糧にしている。大山さんが言う。

「西成は人種も仕事も多様な、何でもアリの町。西成に育つたおかげで、僕には偏見というものがひとつもないんです。こんな人間に育ててくれた西成の先人たちへの恩を、なんとかして次の世代に送

編集部 オススメ!
ヌーメロウノの革スニーカー

大山一哲さんが代表の靴メーカー・ロカシューのブランド「ヌーメロウノ」の革靴。カジュアルな雰囲気ながら、ツヤある牛革は一級品。遊び心のあるデザインにこだわった履きやすい一足。
革スニーカー 39,000円（ヌーメロウノ）

り届けたい。僕がやっつてるのは恩返しじやなくて、恩送りなんです」

大山さんによれば、靴の真価は修理でソールを剥がした時に分かるという。本物は、見えない部分がすごいそう。

やまだせいぎノンフィクション作家。1963年、富山県生まれ。著書に『東京タクシードライバー』（朝日新聞出版社）、『パラアスリート』（PHP研究所）など



沢田さんの靴づくりのようす。師匠・大山さんも「入学1年でこの仕上がりはすごいでしょ？」とにっこり